

\*\*\*\*\*

## ♪ どれみふぁそったくん ♪

～子どものためのアウトリーチ～

\*\*\*\*\*

### 第1章 プロジェクトの概要

#### 1. プロジェクトの名称・目的と方法

##### (1) 名称

♪ どれみふぁそったくん ♪

～子どものためのアウトリーチ～

##### (2) 目的

小学校や医療施設、学童保育など、生の演奏に触れる機会が少ないと考えられる子どもたちに向けて出張で演奏会を行い、音楽の楽しさや面白さを感じる感動体験となるような機会を提供する。

また、実施内容は鑑賞会にとどまらず、楽器のしくみや歴史について楽しみながら学ぶ学習の面を持たせる。現場のニーズにどれだけ応えられているか、企画者側の意向をどこまで実施できるかを報告する。

##### (3) 方法

- ①実施先とアポイントメントを取る。現場のニーズを把握する。
- ②現場のニーズに応じた授業や演奏会の企画案を作成し、実施に向けた準備をする。
- ③現場の方に企画内容を確認して頂き、企画案を修正し改善案を作成する。
- ④実施後、映像記録や子どもへのアンケート結果から、現場のニーズに応えられているか、学習の面はあるか、参加型であるかという3つの視点から分析を行った。

#### 2. 代表者及び構成員

##### ・代表者

西行仁美 音楽領域専攻3回生

##### ・構成員

(運営・演奏)

響尾真希 音楽教育専修2回生  
田又さやか 音楽教育専修2回生  
伊藤史織 音楽領域専攻3回生  
岩本悠香 音楽領域専攻3回生  
肥後結美子 音楽領域専攻3回生  
森下悠児 音楽領域専攻3回生  
(演奏)

絹田真悠 音楽教育専修1回生  
安井晴二 音楽教育専修1回生  
濱村瞳 音楽領域専攻4回生  
山口美裕 音楽領域専攻4回生  
市原愛咲美 音楽領域専攻3回生  
大森祐奈 音楽領域専攻3回生  
寺田有芙 音楽領域専攻3回生  
中田愛美 教育学専攻3回生  
宮側拓哉 音楽領域専攻3回生  
肥後温子 音楽領域専攻2回生  
安藤光平 音楽領域専攻1回生  
榎木蘭直子 音楽領域専攻1回生  
中村安穂 音楽領域専攻1回生

#### 3. 助言教員

田邊織恵先生 (音楽科)

#### 4. アウトリーチについて

Out (外へ) reach (手を差し出す) という意味の英語である。元々社会福祉の分野で行われる地域社会への奉仕活動や教育普及活動などの意味で用いられていた。現在では、現場へ出向いて活動する「訪問○○」「出前○○」といった受け手のニーズに合わせた取り組みも指す。<sup>(1)</sup>

音楽分野でのアウトリーチ活動とは、音楽家や音楽団体などが音楽に普段触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及することであり、さらに提供者と享受者が対等な立場で一緒に楽しむという双方向的なスタンスが特徴である。<sup>(2)</sup>

## 第2章 内容や実施経過など

昨年度は、京都市内の小学校に限定し小学生を対象に企画を実施したが、今年度は視野を広げ、幼児や障害のある子どもたちを対象とする企画も実施した。

- (5月)・研究目的、企画案の検討
- (7月)・各学校への挨拶、訪問日の相談
  - ・第四錦林小学校、新林小学校訪問
- (9月)・第四錦林小学校 授業実施
- (11月)・新林小学校 演奏会実施
  - ・京都教育大学幼児教育専攻企画「うたとおはなしの会」 打ち合わせ
  - ・ダウン症親の会「ぺんぎんのおうち」 打ち合わせ
- (12月)・京都教育大学幼児教育専攻企画「うたとおはなしの会」 参加
  - ・ダウン症親の会「ぺんぎんのおうち」 クリスマス会 参加
- (1月)・第四錦林小学校 訪問
  - ・e-Project 研究発表会

※以下、予定

- (2月)・第四錦林小学校 授業実施

## 第3章 実施結果、分析

### 1. 京都市立第四錦林小学校

#### (1) 実施までの流れ

京都市立第四錦林小学校との打ち合わせの際、「リコーダーには様々な種類があることを知って欲しいため、実際に数種類のリコーダーを演奏して欲しい」という意見を頂いた。

丁度、打ち合わせを行った時期に第3学年はリコーダーの学習に取り組みはじめていた。また、4年生はこれからリコーダーのスタック奏法を学習するということであったことから、第3学年と第4学年の児童を対象に、それぞれ企画を考えることとなった。

第4学年では、生のリコーダーアンサンブルを鑑賞し、スタック奏法(奏法)に注目させるととも

に、スタック奏法の有無による楽曲の雰囲気の違いを感じ取らせるため、次のような実施内容を構成した。授業者は学校と相談し、担任の先生にお願いした。

リコーダーの導入段階である第3学年では、様々な種類のリコーダーによる演奏を聴いてもらい、楽器に対する関心や学習意欲の向上を図ることを目的とし、次のような実施内容を構成した。また、進行は学校と相談し、演奏者が行うこととなった。

#### (2) 実施内容 I

- ①日時 2016年9月15日(木)  
2・3時間目
- ②対象 第4学年1組・2組
- ③ねらい 「息の使い方に気を付けて演奏しよう」
- ④演奏曲目
  - 《聖者の行進》黒人霊歌
  - 《山の音楽家》ドイツ民謡
- ⑤演奏者 田又(ソプラニーノ・ソプラノ・バス)、安藤(ソプラノ)、濱村(アルト)、宮側(アルト)、安井(テナー)
- ⑥展開

- |   |
|---|
| ①簡単に楽器紹介をする。                            |
| ②《聖者の行進》のスタック奏法の有無をはっきりつけた演奏を聴かせる。      |
| ③演奏を聴いた感想をまとめ、スタック奏法の有無による雰囲気の違いに気付かせる。 |
| ④スタック奏法について知らせ、実際にリコーダーで吹かせる。           |
| ⑤児童と演奏者が一緒にリコーダーを演奏し、アンサンブルをする楽しさを知る。   |
| ⑥《山の音楽家》の演奏を聴かせ、それぞれの楽器の音色を知る。          |

#### (3) 実施内容 II

- ①日時 2016年9月15日(木)  
4時間目
- ②対象 第3学年1・2組

③ねらい 「リコーダーアンサンブルを聴こう」

④演奏曲目

《山の音楽家》ドイツ民謡

《アヴィニヨンの橋で》フランス民謡

《虹の彼方に》ハロルド・アーレン作曲

《聖者の行進》黒人霊歌

《笛星人》北村俊彦作曲

⑤演奏者 同前

⑥展開

- 1 楽器紹介として《山の音楽家》を演奏する。
- 2 曲紹介を交えながら、アンサンブル演奏を聴かせる。
- 3 子どもたちが演奏したことのある《笛星人》を、演奏者と一緒に演奏することで、アンサンブルの楽しさに気付かせる。
- 4 演奏を聴いての感想を聞く。

#### (4) 分析と考察

視点① 現場のニーズに応えられているか

今回、実際にソプラノ、アルト、テナー、バスの5種類のリコーダーを使用したアンサンブルを聴かせることができ、現場のニーズに応えることができたと言える。第4学年では授業内容を重視したため、楽器の種類に注目させる時間は短かったが、児童らはソプラノリコーダー以外の種類のリコーダーを見て驚いている様子であった。

第3学年では、授業前半にリコーダーアンサンブルを鑑賞し、様々な種類のリコーダーの音色を聴き比べた。現在の学習段階ではソプラノリコーダーのみを学習しており、様々な大きさのリコーダーに触れる機会が少ないため、児童らは色々な種類のリコーダーに興味津々であった。

視点② 学習の面はあったか

第4学年では、《聖者の行進》を聴かせる際、曲中のスタッカートが付いている部分と付いていない部分を強調して演奏した。その後、気付いたことを発表する場面では、様々な種類のリコーダーの音色に関する感想に加え、「始めの方がはねてい

た。」などのスタッカート奏法に関する意見も挙げた。児童がリコーダーでスタッカートの練習をする際は、演奏者5人が児童の中に入り、児童と演奏者が一緒に吹いたり個別または少人数で教えてもらったりした。そうすることで、より手厚い学習時間を設けることができた。

第3学年では、様々な種類のリコーダーの音色に注目することによって、小さい楽器はより高い音域の音を出すことができ、大きい楽器はより低い音域の音を出すことができることに気付かせることができた。これはリコーダーに限らず、今後学習する様々な楽器に共通する内容であるため、第3学年で気付くことができたのは大きな収穫である。

楽器の長さ、大きさを比べている場面



視点③ 参加型であったか

第4学年では、児童がソプラノリコーダーで旋律を担当し、演奏者がその他の種類のリコーダーで伴奏をするという活動を設けた。演奏者とアンサンブルをすることによって、一緒に演奏する楽しさを感じ取れるようにした。

第3学年では、児童と一緒にソプラノリコーダーで《笛星人》を吹く活動を設けた。これは学校側から提案された既習曲であり、児童も自信を持って吹ける曲として楽しそうに吹いている様子が見られた。

## 2. 京都市立新林小学校

### (1) 実施までの流れ

学校側との打ち合わせの際、「創立 40 周年記念の催しの中で、児童も来場された地域の方も楽しめるような演奏会をして欲しい。また、演奏会の曲目は、生まれ育ったふるさとを思う気持ちを育てるようなものにして欲しい。」と要望を頂いた。

また、学校と相談した結果、進行等全てを本プロジェクトの構成員で行うことにした。

## (2) 実施内容

- ①日時 2016年11月1日(火)
- ②対象 全校生徒及び保護者
- ③ねらい「様々な楽器による演奏を聴くことで、音楽経験を豊かにするとともに、ふるさとを思う気持ちを育てる。」

### ④演奏曲目

#### 校歌

- 《展覧会の絵》ムソルグスキー作曲
- 《ひまわり》葉加瀬太郎作曲
- 《情熱大陸》葉加瀬太郎作曲
- 《乾杯の歌》ヴェルディ作曲
- 《ディズニー・スーパー・ベストメドレー》
- 《ふるさと》小山薫堂作詞/youth case 作曲
- 《ふるさと》高野辰之作詞/岡野貞一作曲(文部省唱歌)

### ⑤演奏者

山口(ピアノ)、安藤(ヴァイオリン)、絹田(オーボエ)、市原(声楽)、安井(声楽)、肥後結(ピアノ伴奏)、肥後温(声楽)、田又(ピアノ)、岩本(ユーフォニアム)、大森(クラリネット)

### ⑥展開

- 1 器楽伴奏による校歌斉唱。
- 2 自己紹介
- 3 ピアノ独奏《展覧会の絵》の演奏。
- 4 ヴァイオリンとオーボエの二重奏を演奏し、その後クイズを交えながら楽器紹介を行う。楽器の特徴や音色を楽しみながら知る。
- 5 お祝いの場面で歌われる《乾杯の歌》を演出を交えながら演奏する。
- 6 ピアノ連弾《ディズニースーパーメドレー》の演

奏。

- 7 合唱曲《ふるさと》に加え、《ふるさと》(岡野貞一)も器楽伴奏を交えながら児童と一緒に歌わせることで、一緒に音楽を楽しむ機会を持たせる。

## (3) 分析と考察

### 視点① 現場のニーズに応えられているか

学校側の要望は、「式典でみんなが楽しめるコンサートを行ってほしい。ふるさとへの思いを深めることのできる曲目にしてほしい。」とのことであった。児童も保護者も楽しめるプログラムをということで、曲目は学校側と学生側で話し合いを重ね決定した。

学校側から、校歌・合唱曲《ふるさと》・《ふるさと》(岡野貞一)は必ず曲目に入れてほしいとの意見を頂いたため、その3曲を加えたプログラムを作成した。その他の曲目は、幅広い世代で楽しむことのできる有名なものを選曲した。

### 視点② 学習の面はあったか

今回の演奏会では、学校側からは楽しめるものであればということで、特に学習の面に関しては必須としない企画であった。学生側の意見としては、やはり児童の前で演奏できる良い機会として、学習の面も持たせることができるという声があった。そこで、ヴァイオリンとオーボエの楽器紹介をクイズ形式にし、楽器に対する知識を楽しみながら学べる場面を設けた。また、選曲に関して、教科書に載っている楽曲も取り入れていこうと学生側で意見を出し合った結果、《展覧会の絵》や《乾杯の歌》をプログラムに入れることができた。



○×クイズを楽しむ児童らの様子

### 視点③ 参加型であったか

今回学校側が「児童と一緒に歌えたら」と意見くださり、児童の既習曲である合唱曲の《ふるさと》、文部省唱歌の《ふるさと》を提案して頂いた。管弦楽器の伴奏に合わせて、演奏者と一緒に歌うことは、児童にとって貴重な機会になったのではないかと考える。

また、今回は衣装や演出も工夫した。衣装は曲目に合ったドレスを着用するなど、より式典らしい雰囲気の中で演奏を行うことに努めた。しかし、児童との距離が離れてしまわないように、児童の周りを演奏者が歌いながら歩いたり、演奏者が役を演じながら登場したりなどの演出を取り入れた。そうすることで、児童にとって演奏会が敷居の高い遠いものではなく、より身近なものに感じることができるようになるのではないかと考える。



奏者が児童らに近づき歌っている様子

### 3. 第 27 回『うたとおはなしの会』

#### (1) 実施までの流れ

本学幼児教育専攻教授の平井恭子先生より、第 27 回『うたとおはなしの会』において「幼児に楽器の音を聴かせたり、演奏する姿を見せたりしたい」という要望があった。

会の進行は幼児教育専攻の学生が行い、奏者は「街の音楽隊」という設定で会に参加することになった。クリスマスの時期であったことから、楽器紹介をする際にクリスマスに関する曲を演奏することにした。

### (2) 実施内容

①日時 平成 28 年 12 月 10 日 (土) 10:30~11:30

②対象 幼児

③ねらい 幼児に生の演奏を聴く機会を持たせる。

④演奏曲目

《ミッキーマウスマーチ》ジミー・ドッド作詞作曲  
《アメージンググレイス》ジョン・ニュートン作詞／作曲不詳

《おもちゃのチャチャチャ》野坂昭如作詞／越部信義作曲

⑤演奏者

絹田 (オーボエ)、山口 (バイオリン)、岩本 (ユーフォニアム)、肥後結美子 (ピアノ)、肥後温子 (歌唱)

#### ⑥展開

1 幼教の学生による歌遊びや読み聞かせなど

2 奏者登場

幼教の学生の「何か音が聴こえてくるよ」という発言を合図に、ステージ端から奏者が《ミッキーマウスマーチ》を演奏しながら登場する。

3 楽器紹介

各自、楽器を紹介し、クリスマスにちなんだ曲を演奏する。

4 《アメージンググレイス》の演奏

5 《おもちゃのチャチャチャ》の演奏

幼児らに小さな打楽器が配られ、演奏に合わせて一緒に楽器を鳴らしたり歌を歌った。

### (3) 分析と考察

・視点① 現場のニーズに込れているか

現場のニーズとしては、幼児に生の演奏を聴く機会を持たせることに加え、幼児の遊びまでに発展できる演奏であること、参加型であることなどがあつた。幼児に生の演奏を聴く機会を持たせることに関しては、参加者からいただいた感想に、幼児が楽器に対して関心を持つようになったなど

の記載があったことから、幼児に良い経験を提供できたと言える。また、参加型である点についても、平井先生から好評もいただけたことから、ニーズに応えられたと言える。一方で、企画の内容について、より工夫できたのではないかという指摘もあった。今後は打ち合わせ等でニーズに応えるための企画の在り方を十分に検討する時間を持つ必要があると考えられる。

#### ・視点② 学習の面はあったか

『うたとおはなしの会』に参加し演奏したことで、幼児らの音楽経験を増やし、音楽や楽器との新たな出会いの場となったのではないかと考える。また、幼児教育専攻の学生を中心とする行事に音楽科として関わることで、幼児に対する音楽指導の方法の1つとして貢献できたと思う。

#### ・視点③ 参加型であったか

今回、平井先生のアイデアで幼児らに打楽器を配り、演奏に合わせて自由に音を鳴らしてもらった。幼児らは、知っている歌や曲が聴こえてくると一緒に口ずさみ、曲に合わせて手拍子や手元の打楽器を鳴らしていた。中には、奏者を真似て楽器を演奏する様に体を動かす子もいた。しかし、「演奏者が子どもの輪に入って演奏するなどの工夫もできたのではないかと」という指摘もあり、応えられなかった部分もあったため、今後は演奏者と幼児の距離がより近く感じられるような企画を考える必要があると感じた。



幼児らにタンバリンやカスターネットなどの打楽器を配った

## 5. ダウン症親の会『ぺんぎんのおうち』

### (1) 実施までの流れ

本学の大学院障害児教育専修の古樋咲世さんからダウン症親の会『ぺんぎんのおうち』主催のクリスマス会において「みんなで踊ったり歌ったりできる曲を演奏してほしい」という依頼を頂いた。

そこで、プロジェクト構成員の中から有志を募り、クリスマスにちなんだ曲を演奏することとなった。

### (2) 実施内容

- ①日時 2016年12月10日(土)  
15:00~16:00頃
- ②対象 『ぺんぎんのおうち』所属の子どもたち
- ③ねらい「障害のある子どもたちに生の演奏を聴いたり音楽を楽しむ機会を持たせる。」

### ④演奏曲目

- 《ひいらぎかざろう》ウェールズ民謡
- 《赤鼻のトナカイ》ジョニー・マークス作曲
- 《オーホーリーナイト》アドルフ・アダン作曲
- 《素敵なホリデイ》竹内まりや作曲
- 《ジングルベル》ジェイムズ・ピアポイント作曲
- 《サンタが街にやってくる》フレッド・クーツ作曲

### ⑤演奏者

西行、中村(ピアノ)、中田(アルトサクソ)、伊藤(ソプラノリコーダー)、榎木蘭(クラリネット)

### ⑥展開

- 1 奏者登場、自己紹介
- 2 《ひいらぎかざろう》演奏、楽器紹介  
演奏後、ソプラノリコーダーとクラリネットの楽器紹介を行った。
- 3 《赤鼻のトナカイ》《オーホーリーナイト》演奏
- 4 楽器紹介、《素敵なホリデイ》演奏  
アルトサクソの楽器紹介後、演奏を行った。
- 5 《ジングルベル》演奏

鈴やタンバリンを手にとった子どもたちに演奏に合わせて楽器を鳴らしたり歌ったり踊ったりしてもらった。

6 《サンタが街にやってくる》演奏

子どもたちと一緒に演奏を楽しみながら、子どもたちにクリスマスプレゼントとしてお菓子を配って回った。

### (3) 分析と考察

#### 視点① 現場のニーズに応えられているか

今回のダウン症親の会「ぺんぎんのおうち」側の要望は、「クリスマスソングをいくつか演奏し、そのうちの何曲かはみんなで歌ったり踊ったりできること」ことであった。そこで実際にクリスマスソングを5曲演奏し、そのうちの2曲において子どもたちに鈴やタンバリンなどの楽器を鳴らしたり歌ったり踊ったりすることができたため、現場のニーズに応えることができたと言える。

#### 視点② 学習の面はあったか

クリスマス演奏会において楽器を演奏したことで、「ぺんぎんのおうち」に所属する子どもたちの音楽経験を増やし、音楽や楽器との新たな出会いの場となったと考える。また、子どもたちとその家族の方々が幸せな時間を過ごすことに関わるという意味において、社会的な貢献を果たせたと言えるのではないかと。

#### 視点③ 参加型であったか

今回は依頼内容に「みんなで歌ったり踊ったりできること」が含まれていた。このため、現場のニーズの中に参加型であることが含まれていたと言える。実際にそれに応えることができたため、参加型であったと言える。

## 第4章 まとめと反省、今後の展望など

これまで三つの視点を持って活動を行ってきた。視点の一つ目である「現場のニーズに応えられ

ているか」については、ニーズの内容を具体的に把握するために、現場側とより密な打ち合わせを行う必要があったという反省点が挙げられた。

二つ目の「学習の面はあったか」については、今後、福祉施設や院内学級などへ活動を広げていく可能性を考えると、全ての企画に対してこの面を持ち続けることは難しい。「学習」の捉え方を再考していく必要がある。

三つ目の「参加型であったか」については、今回行った企画の全てで実施できたと考える。今後も演奏をしに行くだけのアウトリーチに留まらず、子どもが主体となるように演出を工夫するなどが課題である。

活動全体を見て、今年度は、昨年度の課題を踏まえて対象の視野を広げ、幼児向けの演奏会や障害児のための演奏会などを活動に取り入れることができた。また、今年度は演奏の依頼を受ける機会が何度かあり、活動が広がっていく兆しを感じることができた。

また、演奏面の課題として、奏者の問題が挙げられる。音楽領域の学生だけでは奏者不足になり、ニーズに合う奏者の確保が難しい。ニーズに応えるためには他の団体の協力が必要となる。奏者を確保するために音楽領域の学生間にこの活動を広め、多くの学生に知ってもらうことで連携の取れる団体を増やす必要があると考える。

### <参考・引用文献>

- (1) 松本 菜摘,河添 達也 (2015)「小学校音楽科における「教育プロジェクト型アウトリーチ」の授業開発研究」『島根大学教育臨床総合研究』島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センターpp.181-190
- (2) 林睦(2009)「音楽のアウトリーチ活動に関する一考察—日本における導入 10 年と今後の課題」『音楽教育学の未来』音楽之友社, pp.280-290.